

再び「封建制から資本主義への移行」について

モーリス・ドップ

ポール・M・スウィージー

ここに掲載するモーリス・ドップならびにポール・M・スウィージー両氏の寄稿は、はじめ『経済研究』第2巻第2号、1951年に「封建制から資本主義への移行——ドップ・スウィージー論争に寄せて」と題して掲載され、その後『サイエンス・アンド・ソシアティ』第16巻第4号、1952年に轉載された高橋幸八郎氏の批判的論文に対するコメントとして、両氏よりとくに本誌のために寄せられたものである。なお、高橋氏が批判したドップ・スウィージー両氏の論争は、『サイエンス・アンド・ソシアティ』第14巻第2号、1950年に掲載され、また『経済研究』第2巻第1号、1951年に轉載された。——編集部——

高橋教授の批判に答えて

モーリス・ドップ

「封建制から資本主義への移行」に関する高橋教授の示唆的な論文——いくつかの重要な論点についての、われわれの評価を深めかつ擴めるうに重要な貢献をなす——に對して、私は、大體において賛意を表したいとおもう。教授の言われたことに私がつけ加えたいとおもうこと、またつけ加えうることは、ほとんどない。ことに教授が「二つの道」の概念を展開し、それをブルジョワ革命の道とプロシャや日本の道との對比を明らかにするために用いられたことは、私にとって、とくに教えられるところがある。私は、私じしんへの批判として、教授が述べられたことに關して、ただ三つの点だけを釋明したいとおもう。

教授は、私の書物が、「フランスやドイツの著作に十分な注意を拂っていない」と言っておられるが、これはもちろん全く正當である。そればかりか、教授は、私が南ヨーロッパ、ことにイタリアやスペインの經驗をほとんど全く無視してしまったとつけくわえられたとしても、さらに一層正當である。私としては、これは故意にやっ

たことであり、そこで私の書物も、その選擇的かつ部分的な性格を示すために、『…の諸研究』という表題をつけたのだということをおことわりできるばかりである。たとえ概説としてでも、資本主義の包括的な歴史を書くつもりは毛頭なかった。ここに用いた方法は、私が明確にしようとしていた特定の問題点を明らかにするために、ときとして大陸の平行現象（例えばギルドや問屋制度の發展に關して）や對比現象（例えば東ヨーロッパの封建的反動やプロレタリアートの創出に關して）に言及しながら、なによりもまず、古典的な例としてのイギリスを基準として、資本主義の發展における二三の決定的な局面や様相をとりあつかうことにあつた、といつてよいとおもう。これらの平行や對比をそれにふさわしいだけ十分に展開し、そこからいろいろな条件のもとでの資本主義の起源や成長の完全な比較研究のようなものを行ったとしたら、それこそヨーロッパの歴史的文献についての廣汎な知識を要したにちがいない。が、私にはその資格がなかった。私よりはるかに多くの百科事典的な

知識のもち主でさえ、おそらく高橋教授が言われる「これらの研究における共同的な前進」の10年ばかりを、またねばならなかつたらう。

第二に、高橋教授は、私が自分の書物のなかで、イギリスの14世紀から16世紀までの時期を「封建的でもなく未だなお資本主義的でもない」と言ったと主張しておられるが、これは教授が私の問題のたてかたをそれについての私じしんの結論だというふうの間違って受けとられたのだとおもう。もしも、教授が、私の書物の19頁の文句をもう一度みなおされるならば、私がここで、この時期についての非常に多くの研究者たちが直面した困難を定式化して、ひとつの疑問(事實その文章のおわりには疑問符がついている)を問うているのだということがおわかりになるだろう。私はすぐ次の頁で、封建制が分解し、そして「すでに封建制からその獨立をもちえたひとつの生産様式、すなわち、それじしんの内部に資本主義的諸關係の胚芽を含んでいたとはいえ、未だなお資本主義的ではなかつた……小生産」があらわれていたにもかかわらず、ひとは未だ封建制の終末を語ることはできないと述べている。「しかし、ひとが封建制の終末と金納化の過程とを同一視としようとしないう限り、……ひとは未だ中世制度の終末を語ることはできないし、ましてや中世の支配階級の廢位を語ることはできない。」——20頁)[頁數は原文のもの、以下スウィーギーの場合も同じ——譯者。]うたがいはなく、私があまり農業に言及しなかつたことが、(教授はそれを批判しておられるが)私の結論の論據をはるかに弱くしている。しかし、この點について、私は、トニーその他若干のひとびとによって説明がなされたとはいえ、今後なお、この時期に關する専門家たち——マルクス主義の方法によって導かれる専門家たち——によって、多くの實地調査がなされなければならないものと信じる。さらに私は、以前の原稿に含まれていた私じしんの以前の見解が、最後の所説のなかにもその痕跡を残していたかもしれず、そのために表現がずっと不明瞭となったことを認めるにやぶさかでない。しかし、エドワード3世からエリザベスまでの時期が、「封建的でもなく未だなお資本主義的でもない」かつたという見解を裏書きすることは、決して私の意圖ではなかつたのであつて、事實、私の書物の20頁には、この時期が「過渡的」——これについて高橋教授は『サイエンス・アンド・ソサィアティ』における私の「回答」に、はじめて發表されたひとつの「修正」と呼んでいるが——であつたということが述べてある。

とはいえ、私はさらに、私が述べたもうひとつのはっきりした敘述、すなわち、「封建的生產様式の分解は、資

本主義的生產様式が發展する以前に、すでにある進んだ段階に達しており、またこの分解は古い生産様式の母胎内における新しい生産様式の成長とはなんら密接なつながりをもつて進行したものではなかつた」という敘述を辯明しなければならない。それは、この過渡的な數世紀が「封建的でもなく未だなお資本主義的でもない」かつたということの意味しているのではなく、むしろその逆のことを意味しているのである。そして、私は、それは、きわめて多くのひとびとをして、この時期についてのスウィーギーの見解に近い立場をとらせるに至つた困難に對する鍵を與えるものであると信じている。私は、それを、おそらく高橋教授も全面的に受けいられるとおもわれるテーゼの、一般的かつ豫備的な形式における敘述とみなした。すなわち、封建制の分解は(したがつてその最後の没落の段階は)一般に考えられているように、「貨幣經濟」と密接に結びつた「商業資本」の假面をかぶつた初期「資本主義」の封建制に對する攻撃の結果としてではなく、封建的搾取に對する小生産者の反抗の結果として起つたというテーゼである。小生産者のこの部分的な獨立は、かれらのあいだの社會的分化の過程を加速度的にすることによって、それじしんの分解(これがその過程の發端ではなかつたにしても)を加速度的ならしめる結果となり、そして、この過程のなかから(しかし没落封建制の過渡期における資本制生産様式の成熟の後においてはじめて)資本制生産様式が生れた。高橋教授じしんの言葉をかりて言えば、「この小規模借地農經營——農業における小生産様式——は、現物地代が貨幣地代に轉化されるとともに、よりますます明確に獨立的になり、それと同時に、その自己分解もまたよりますます急速かつ自由に展開されてくる」。ここでのわれわれのあいだの唯一の意見のくいちがいは、はじめのほうの時期とおわりのほうの時期のこの「自己分解」の程度について、力點のおきぐわいが違つているかもしれないということだけのようにおもわれる。

第三に、「二つの道」と私の問屋制度への言及とについては、高橋教授が、私が第一の道に屬するものとして、イギリスの小規模家内工業の類型の問屋制度をこれに含ませたとされる限り、教授の解釋は正しい。もっとも、私はすでに、「産業資本の擡頭」をとりあつた私の章の中で、私が問屋制度をひとつの同質的な經濟形態とみなしたのではなく、むしろいくつかの異つた類型を包含する複合的な現象に對する包括的なよび名とみなしたということをつららかにしたつもりだつた。つまり、私は、金物商、毛織物商、毛織物仕上工、皮革商、のようなカムパニー商人たちによって組織されたひとつの純粹な前貸

問屋型の産業類型を、商人から工業家へという第二の道としてとりあつかい（私の『諸研究』の129—134頁参照）、さらにすぐつづいてこれに對し、次のような運動を對比させた。すなわち、リヴァリー・カムパニーの（從屬的な）「ヨーマンリー」を構成する職人の列伍からの商人製造業者雇主の階級の擡頭や、これらの要素（それについてアンウィンが書いている）よりなる新しいシュアート・コーポレーションの挑戦の形をとってあらわれた運動がそれである（134—48頁）。このような問屋制度の下からの組織形態が、とくにイギリス的な現象なのか、それとも大陸にもこれに平行する現象があるのか、これについては、私は敢て獨斷的な意見を述べることは差し

控えなければならない。ここでは、私は、次のことを示唆しうるだけである。それは、大規模な資本主義的企業家ばかりを探し求めたということが、ことによると大陸の歴史學者たちをして、小さななりあがり型の商人製造業者たちが果した役割に對して、めくらにしてしまったのかもしれないということか、問屋制度の本當の姿は、ドイツにおいてさえ、ドイツの經濟史家たちが述べているほど體系的にまとまったものではないかもしれないということである。われわれは、もう一度、高橋教授が言われるような、各國でのそのような諸問題の研究における「共同的な前進」に懇えねばならない。

高橋教授ならびにドップ教授の批判に答えて

ポール・M・スウィージー

私が初めてドップの『資本主義發展の諸研究』をとりあげたとき、いちばん私を困らせた問題は、簡単にいえば、次のようなものだった。すなわち、中世初期には、西ヨーロッパの至るところにドップが36—37頁で適切に記しているような封建制度が存在した。この生産様式は、ひとつの發展過程を経て危機と崩壊に到達し、そして資本主義によってうけつがれた。形式的にいえば、資本主義と人間の一生との類比——發展、一般的危機、社會主義への移行——は非常に密接なものがある。ところで、私は、資本主義の場合における主たる推進力の性質は何か、それが生みだす發展過程が何故に危機に導くのか、そして社會主義が何故に必然的に後續の社會形態であるのか、ということについてはかなりうまい考えをもっている。しかし私はドップの書物にとりかかったときには、封建制の場合におけるこれらの要因のいずれについても、いっこうにはっきりしていなかった。私はその解答を求めていた。

私がドップの書物にいちばん感謝している點は、それを讀みおわったとき、私のこころのなかで、これらすべての疑問が以前より非常にはっきりしたとおもわれたことである。これは一部分はかれが私をうまく納得させてくれたためであり、また一部分は私が他の資料をのぞき

こみそして私じしんの資料について若干改めて考えなおすように刺戟してくれたためだった。『サイエンス・アンド・ソサイアティ』の私のもとの論文は、私がすでに到達していた試案的な解答についてのひとつの報告というような性質のものだった。（ついでながら、私は、このことをもっとはっきりさせておくべきだったとおもう。ドップは、もちろん、かれ流にかれの問題を定式化した。そして、かれは私が解答を求めていた疑問とは——たとえ関係があったとしても——ほんの間接的に関係があるだけのものに多くの關心を寄せた。そこで、私の「批判」の若干は本當はなんら批判にならなかった。これらの批判は補足的な示唆や假説として提出すべきであったのだ。）

ドップは、その『回答』のなかで、私の解答と一致しないいろいろな點を指示し、また高橋は、もし私がかれを正しく理解しているとすれば、私の回答を殆んど頭から排撃している。しかし私は、ドップの返答（もちろん私の疑問にたいする）が何かということについては、かれの書物を讀みおわったときにわかった以上にはほとんどわからないし、さらに高橋の返答が何かということについてはなにもわからないに等しい。だから、私は、この與えられた再答辯の機會を利用して、いくつかの私の